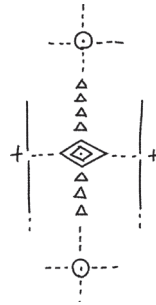


# COSMOS集



斎藤 梢選

「あすなる集」特選

ねぶた 成田裕子\*青森

風に乗り届く笛の音少しだけ心が祭りに近づいていく  
 だだだんと太鼓が胸の内側に響きねぶたの武者ら現る  
 鉦、太鼓笛従えてねぶた武者ゆらゆらと行く目抜き通りを  
 「じゃわめぐ」という津軽弁 歓声を上げて人々ねぶた見上げる  
 数万のスマホの群れを睨みつつねぶた武者行く夏が過ぎゆく

星の寿命 斎藤洋子 群馬

四度目で保育士試験合格す五十六歳頑張りました  
 合格の葉書が届き夫からの突然のケーキプレゼントあり  
 杖をつく父を食事に誘ひたり歩幅合はせてゆるりと歩く  
 おおけ屋敷のおばけとなりて驚かす怖がる子らの一人と目が合ふ

アルタイル、デネブを語る男児あり星の寿命を教へてもらふ

思いっきりの夕立 森下たみ\*埼玉

九十近き我が身の変化に驚きぬ人間このようにおとろえゆくのか  
 九十五の夫と二人で身をちぢめ秋の到来ひたすらに待つ  
 歌一首出来れば心おだやかに夫にかけける言葉もやさし  
 炎天に手も足も出ず庭見れば空屋かと思うほどの庭草  
 真夏日の思いっきりの夕立に心のうさもいつしか消えゆく

親の字 人見江一\*神奈川

信州の牛蒡が届く夏まひる上がりがまちは畑の匂い  
 夏空に白球見上げし日もはるか汗目に沁みるキャッチャーフライ  
 トンボさん、それは車のサンシェード、キラキラ光るが池ではないぞ  
 人生のけじめをつけた六十五やりたいことをするために退く  
 親の字は立つ木の横で見ると書くわが子を信じ見まもる日々よ

朝顔のカーテン 大越美佐子 東京

夕立に出来た水溜り何事も無かつたやうな青空映る  
 コードレス掃除機は楽と言ふ夫の掃除近ごろ少し念入り  
 レジに並ぶ私の前の作業員服の扇風機二つが唸る  
 シオカラかアキアカネかと朝顔のカーテン指せば夫も寄り来る  
 仕舞ひ込みしアルバム幾度も見返して今日は手放す断捨離をして

松尾 祥子選

傷

清水美里\*東京

パンプスのかつかつかつは痛みのみ踏みしめてきたわけじゃないけど  
見えてたり見えなかつたりうまいこと縫ってあつたり塞いだり傷  
手にパンのやわらかさただ心地よい(夏の終わりがいつか知らない  
渡り鳥 あなたの国では何という名ですかあなたの国どこですか  
空きはないけれども詰めてほらここへ隙間を埋めるものまたひとつ

生後 百日

宮 梓 一\*東京

終戦の日の黙禱で泣き出した子どもは今日で生後百日  
終バスで帰った夜は息子へと声をかけずにシャワーを浴びる  
パパ似だと言われることは嬉しいが頬のふくらみならば哀しい  
右斜め四十五度で見おろすと息子の顔が弟のよう  
紺碧の空が紺碧すぎるから子どもを連れて外出できない

ダッチオーブン

金子英子\*新潟

炭を乗せダッチオーブン加熱する夏のキャンプで汗流しつづ  
初めてのダッチオーブンッキング海老とチキンのパエリア完成  
キャンプ旅最後の晩はすじ肉のカレーとカルーアミルクで乾杯  
健康のためにクーラーつけるとは未だ矛盾を感じる猛暑  
八十の母はスマートウォッチ着け音声入力で調べものする

もんぺ 四谷 範 富山

NTTの「紙の電話帳」「一〇四」が百三十年の歴史を閉ぢる  
八月朔日梅雨が明けたり庭隅にいち日花の檜扇の咲く  
大島の着物を解きてもんべにす軽くて涼しく衣擦れのよし  
まるまるの西瓜をみれば撫でるよりほんぽん叩いてみたくなる癖  
毎日の暑さに干したる梅干は色鮮やかにふつくら仕上がる

初生りの胡瓜

時 田 泰 子\*静岡

梅雨晴れ間合歓の糸花咲くを見て夫は今年の大豆播きたり  
ひと昔前の男孫の教材の朝顔今年もフェンスを飾る  
初花の朝顔だよりに孫の返事「長生きだね」とラインが届く  
出来ぬこと増えゆく我と出来ること増えゆく娘に教わるスマホ  
初生りの胡瓜一本プラスして夫と食べあう朝餉のサラダ

大松 達知選

ダイヤル式

池田 あつ子 愛知

猛暑日の庭の草木はへたへたとわが身のやうで 水を飲ませる  
出で入りのたびに門扉のきしみをわが身の骨の音のやうなり  
この門扉なほしくれたる人すでにこの世に居らずもう直せない  
丘の上に電話ボックス立つ夢のダイヤル式の電話鳴りだす  
あの頃の君への電話 ダイヤルを回しゆく音鼓動となりて

ジャンボ 岩 館 澄 江\*愛 知

汐留のビルのあいまをぬってゆくわたしも影もまちがつてい  
りビングにならぶ『地球の歩き方』どの国もまた行くいで見る  
結婚をするまで彼氏だったことふやけていつたお風呂の夫  
まだ父は今年うまれたこの犬のいっしょうぶんの寿命が残る  
こんにはわたしのメールアドレスのジャンボスミエのジャンボはハロー

パツフェルベル 三 浪 治 子 三 重

兄弟も娘も息子も寄り付かず長く病みたる義兄の直葬  
火葬炉に運ばれる義兄を見届けて湧くものもなく次の話す  
猫じやらし、かやつり草の穂が高き庭の畑に鎌持ちて入る  
膝と腰の痛みこらへて夏草の猛き勢ひわづかづつ刈る  
子どもがいつかきくわが葬送曲(パツフェルベル)をひとり聴く夜

子供のぼく 田 原 五 郎\*京 都

みどりからあふれるような蟬の声シシシシシシー小さな宇宙  
朝起きてパンと牛乳口にするふわり過ぎてくなにげない日々  
夕立ちに追われてしばし雨やどりふと思いだす子供のぼくを  
プライドと自己憐憫のくり返し日付は知らずある日の日記  
主人公誰がいるだろぼく以外ぼくの行く道ぼくの人生

元氣な友人 大 池 アザミ\*兵 庫

不思議だが雨の降らないからからの庭で雑草ぐんぐん伸びる

夏休み始まったのだ町なかのいたるところで子ども見かける  
少年の自転車群れ渡り鳥みたい無言で国道走る

カーテンのすき間から入る朝の陽がやたら元氣な友人に似る  
ぞんざいに扱ったのは百均で買ったこととは関係ないが

原賀 瓊子選

祭 と 戦 井 上 喜美子\*山 口

ニユースショウ オリピックの活躍とガザの惨事を同時に伝える  
若者の特権のごときブレیکن弾けるように肉体廻す  
祭と戦どちらがよいか誰にでも解る映像今日もながれる  
兄弟かそれとも友か空蟬の重なりて在る椿の小枝  
子と孫と祖霊帰りし益明けはすることのなく朝を迎える

オリーブの木のある家 石 本 洋 子 佐 賀

べた風となりたる湾に夕焼けの朱色が降りて一日が終はる  
有明海の潮の引きたる朝よし海と渦とがにほひ交へて  
「迷惑をかけたね」と夫が新幹線降り際に言ふ 旅は終はりぬ  
オリーブの木のある家に憧れて遅まきながら苗二本植う  
筋トレの片足立ちを六〇秒、夏瘦せの身の修復をせむ

蝦夷地の港 白 井 玲 子 佐 賀

すつつ 東京都 東京都町字歌棄の地名が気になる蝦夷地の港  
ミズバシヨウの根も喰ふと言ふ熊の舌針刺すやうな滋味あるらし

真昼間のジンベイザメに似る雲よ地震雲とは呼んだりしない  
落花生を地の底豆と言ひし妣 湯気あがる豆大皿に盛る  
涼風を袖が聞くけふ立秋の呼々夏盛り酷暑日つづく

口 コ モ 鶴 田 竹 一 長 崎

飛ぶ蝶を叩き落として野良猫のガブリ一飲み夕立の庭に  
日当たらぬ谷底に群るる葉蘭らも握り飯数多包めるものを  
また今年いつもの畔に野百合咲きしばし眺めて草刈り始む  
片足で靴下はけねば口コモだと告げられやればやはりよるめく



田中 愛子選 「その二集」特選

コ ウ モ リ く どう れ い ん \* 岩 手

これがさみとの最後の遠出かもしれず帰路に津軽を過ぎれば阿闍羅<sup>あじろ</sup>  
ソフトクリームはじめて巻いたときこれは永遠の一部だと思つた  
もつとこゝ妻みを出したいのだけれどと言いつつ飲んだホワイトソーダ  
結婚をすれば祖父母が倍になり義祖母は傘をコウモリと呼ぶ  
山形にくだもの畑ばかりあり楽器倉庫のような静けさ

带状疱疹の予防接種代二万円に考へ直す年金暮らしは

アインシュタインの髪 小森田 より子\*熊本

睡眠時無呼吸症候群なるや突然せみは鳴くのをやめる  
ベランダの細き枝にもアブラゼミ夫は捕り方語りはじめ  
久々に得意料理にいとどめども秘伝のタレの蓋が開かない  
夏休み「アインシュタインの髪みたい」寝起きの我を笑う八歳  
熱中症警戒アラート発表後庭のカラーに日傘さしかく

白 日 傘 水 鳥 葉 子 茨 城

骨洗ふごとき淋しさしんと原野にひとり秋風を聴く  
ゆで卵の白身はがれて剥き惑ふ厨に暑き夕暮れは来る  
百体の首なき地藏並びて奥の院への参道暗し  
四つ角を東へ行けば新しい路地に入りて旅人となる  
海見ゆる丘の霊園ひそけて入りて戻らぬ白日傘の人

空 は る か 谷 川 恵 埜 玉

わたくしの分までまはれ向日葵よ夏のひかりを吸つて育てよ

カーテンは遮光一級 薄ピンクの薔薇の向かうの空はるかなり  
長袖で過ごす三年目の夏は冷感素材に詳しくなりぬ

夏風邪をひきつづけたる二ヶ月に増えた気がする争ひごとは  
ツナ缶のツナをフォークでほぐすやうにわたしをほぐす道具がほしい

歌集を選ぶ

柚木 ひかり\* 神奈川

うすみどり色の木の葉は初々し少年のまま夏へと向かう  
狭小に切り取られたる空ありて目を閉じしまま夏の陽を浴ぶ  
いずれにか仕舞い込みたる風鈴の音をあれこれと想像しおり  
聴力の検査を終えて補聴器のカタログ捲る夕刻近し  
野の原に好みの花を摘む如し書店に入りて歌集を選ぶ

青椒肉絲

松下 誠 一\* 東京

紛らわすことのできないさびしさに温めなおす青椒肉絲  
花びらが自重に落ちてゆく夜の触れずにいるさみの退屈  
土手のうえに立って夜風の道のりの過程につくる小さな楕円  
行政の関わっているイベントのはじめて見るしじみのマスコット  
じいちゃんの書斎の本を読んでもと鼻水がつるつる垂れてくる

水上 比呂美選

フーガの主題

佐藤 弥生 新潟

シベリアの空を飛ぶとき戦ひてここに果てにし叔父を思ふも  
幾時間ながめ変はらぬシベリアのエニセイ川をいま越えしといふ

北海のリューベックの街飛べるときバッハのフーガの主題聴こえ来  
ひる過ぎに成田を発ちて午後長しフランクフルトのたそがれに立つ  
ザルツブルクミラベル宮の庭園の石段降りて薔薇の香をかく

顔のヘンサチ

佐野 庸子\* 新潟

千円のスイーツやめて千円の花苗を買って年金支給日  
草むらにぼつぼつ光置くように昼顔咲けり小雨降る朝  
今朝もまた散歩の吾の足止める毒持つ花よキチガイナスビ  
孫たちの話に耳をそばだてる議題は深刻顔のヘンサチ  
白き百合咲く庭に出て金色こんじきの月を眺める今宵満月

丸い窓

小田 沙也加\* 愛知

下向いてばかり歩いた春だったカラーレンズに映る夕焼け  
伝聞で知るくらいならもういいや桃の果汁がフォークを伝う  
満月を口実にしてばかりいて丸い窓なら欲しいと思う  
地下鉄の階段しずかに降りゆけば呼吸が変わる深海魚になる  
靴底がすり減ったことハンガーにヒビがあること雨が止まない

群鴉の彩

谷口 久美子\* 三重

梅雨晴のひとときわ高き青空を巢立ちを迎えつばめ飛び交う  
つばくらめもう旅立つか道中は元気でいけよ来年またな  
若冲の群鴉の彩鮮やかに三百年を今よみがえる

手にとれば諦めがたししくりと両手に納まる薬焼茶碗  
コロナ禍に会うことかなわぬ夫送りオベの長きに身を硬くする

武士の手つき 川田 ゆかる\*大坂

夏の輪郭 山添 聖子\*奈良

真夜中に転がっていく缶の音カーテン越しの耳にひりつく  
その犬は上目づかいにこつち見て私が先に視線を逸らす  
ストローを抜いた袋のふくらみを武士の手つきで平らにする人  
頬杖で知る体温の生ぬるさ置きっぱなしの豆乳オーレ  
ビルの間に夕陽差し込み足元の横断歩道はたまご色なり

桑原 正紀選

口下手な父 金 砺 靖子\*兵庫

早苗田で 新 敦子 鳥取

しゅわしゅわと控えめに鳴く梅雨の蟬大暑の今朝は大合唱する  
食卓の鱧の湯引きの淡雪のような白さに涼を味わう  
「ありがとう」口下手な父が言うたびに残された刻が減っていくよう  
私には聴くにきけない音らしい 若者は知るモスキート音  
義経の葛籠のようなボックスを背負ってウーバーイッツが来たる

空中を行く 八木 かおり 奈良

光ひとすじ 小田 美恵子\*宮崎

巨人ファンと広島ファンの暮らす家スポーツニュースは薄氷の上  
ツナ缶を開ける淋しさ足もとにもう来ない猫 逝きて三年  
花火する約束の子ら夜を待たず暮れ方早く集ひ始める

通院の帰り夏空どこまでも京奈和道は完成間近  
西船場、阿波座、波除、朝潮橋 湾岸高速空中を行く

まくわ瓜のことを「まっか」と呼んでいた祖母の声ふと思い出す夏  
恐竜の赤ちゃんを抱くように持つ大きなゴーヤ三つもらいて  
なまぬるき夜の手ざわり ああこれはどこかにオオサンショウウオがいる  
子の頬を火花が照らすこの夏の輪郭はまだ少し幼い  
戦いのための火薬を一瞬で火花に変えて終わってよ、夏

早苗田のくぼみに蝌蚪のかたまりてまばたきほどの水輪の光る  
早苗田でどろんこあそびするやうに蝌蚪散らばりてどろけむり立つ  
おしやれぐつのやうなフリーズ(ロング丈ひざ下まで)の田植靴買ふ  
丈長く履き口狭きをものとせずたくねたくねて履く田植靴  
ゆたかなる苗代水の源は先人引きし多鯰ヶ池なり

お神輿を高校生らが担いでる高齢社会に光ひとすじ  
担ぎ手のために百束のそうめんを茹でて待ちおり猛暑のなかを  
差し入れのそうめん三杯たいらげた高校生はサッカー選手  
朝夕に水をやれどもサルビアは日に日に弱り猛暑日続く  
外出を控えるという友からの午後の電話はことさら長し